注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ネギ・ギア

【作者名】
はーめるんな男

【あらすじ】
原作知識なしの転生ものです
もしもネギまの世界にエア・トレックがあったらという妄想です
※独自設定、ご都合主義アリアリです
評価０～５の場合はできるだけコメントを残してください

ギア1

Ａ・Ｔ（エア・トレック）

『「Ａｃｔｉｖｅ　Ｉｎｄｕｓｔｒｉａｌ　Ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ　Ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙ　Ｒｅｐａｉｒ　Ｅａｒｔｈ　Ｃａｒｂｏｎ　Ｋｎｏｃｋ－ｏｆｆ」の略称。コンピュータ制御で４ｋＷの出力が出せる超小型モーターを搭載した架空のインラインスケート。クッションシステムを内蔵し、使い方次第では自在に「飛ぶ(エアと呼ぶ)」ことを可能にする別名"自由への道具（エア・ギア）"。Ａ・Ｔを使って決める（魅せる）技のことを「技（トリック）」と呼ぶ。　形状は通常のローラースケートのような二輪の"ウィール式"、その派生で片方につきタイヤが一つしかない"ワンウィール式"、扱いは難しいが独特の走行感と機動性が魅力の、無数の球体型のタイヤを持つ"ボゥローラー式"などがある。一口にウィール式のＡ・Ｔと言っても使用者によって様々な形状をしており、ブーツのようなものも多い。ワンウィール式はハイヒールのような形状から女性が好み、ボゥローラーＡ・Ｔの形状は革靴に似る。　当初はストリートの若者が作り出した遊び道具とされていたが、実際はロスト・エネルギー問題の切り札として、無重力空間内を移動するために「天空（トロパイオン）の塔」で作られたものだった。Ａ・Ｔを使って飛ぶ者たちのことを「暴風族（ストームライダー）（ライダーとも略される）」と呼び、基本的には複数のメンバーが集まった暴走族のようなチームを結成している。　Ａ・Ｔの踵の部分にはメモリースティックが内蔵されており、走行距離やエアの記録、これまで使用した技などの"走りの記憶"が常に保存されていく。メモリースティックは電脳空間ロン・ホーツ・ボーン・街を通じて世界中とリンクしており、メモリーデータに詰まった"ライダーの魂"が厳重に保管されている。』

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより引用

これが世界に広まったのは約１０年前だ

これの登場により世界は一変した

町にはA・Tを履く少年少女にあふれ、戦争にもその技術が応用されるようになった
無数の暴風族が入り乱れ始めた
その世界の波は例外なく麻帆良学園にもたどり着いた
学園側は増加する学区内でのA・Tの使用についての意見に根負けし、全面的に許可した
その結果学園内にも大量の暴風族がひしめくことになったのだがこれには裏があるというわさもある
だがそんなことは今はどうでもいいのだ
問題は…
「おいおい、嬢ちゃん！無視はないんじゃねーの!?」
この周りにいる大量の暴風族だ
「厄日だなこりゃ。」

「くそ！こんな時に限ってからまれるとか最悪だな。」
私は長谷川　千雨
どこにでもいるタダの小学六年生だ
人並みの成績で人並みに趣味もありその趣味も無難なA・T
腕前もそこそこといったところだ
そんな私は今A・Tで爆走中だ
今日秋葉原に行ってきた帰りにこんな馬鹿どもに絡まれてしまった
それもこれも全部
「いいからそのパーツ寄こせ！」
この腕にかかっている袋の中のA・Tのパーツのせいだ
今日はたまたま秋葉でいいパーツが安く売りに出されていたためそれを買いに行ったのだ

私はお目当てのパーツを買えたのだがそれと入れ違いに今私を追いかけてきている馬鹿どもが入ってきた
この後のことは想像がつくだろう
馬鹿どもの目当てもまたわたしと同じパーツで私が先に買ってしまった
そんなときの馬鹿の行動はたった一つ
「奪い取るとか原始的すぎんだろオイ！」
そんなことを叫んだ時に足元のＡ・Ｔが急にパワーを落とし始めた
（あれ？バッテリー充電すんの忘れたっけ？）

そして冒頭に戻る

「いいから渡せって！嬢ちゃんなんかよりも俺たちはもっとうまく使えるんだからよ！」
さて、これはどうにもならないかな？
馬鹿どもはおそらく高校生
それが五人もいるのにたいしてこっちは小学生が一人
しかもこちらはＡ・Ｔのバッテリーがない状態
あきらめるしかないか
「わかった、わたｓ「ちょっと待った！」は？」
私があきらめてパーツを渡そうとするとどこからか声が聞こえてきた
そして聞こえてくるモーター音
それは間違いなくエア・トレックなのだがどこか心地よく、一つの旋律になっているようだった
その音が聞こえたほうを見てみると近づいてくる影が二つ

そして私はこの日から巻き込まれていくのである
学園の陰謀に、世界の真実に、もう一つの世界に
そしてその中を駆け抜けていくのである
A・Tとともに

ギア2

俺の名前は南　宙（みなみ　そら）
神様によって転生させられた転生者だ
なんでも、暇だから暇つぶしにって転生させられたのだがそこで「はいそーですか」とただで転生する俺じゃあない
転生特典を要求したのだ
神曰く「えー、そんなことしたらつまんないじゃん」とのことだったのだが俺には関係ない
そんな神の意見を無視して特典を要求したところ渋々ながらＯＫがでた
その代りに転生先は選べなくなったけどな
俺が要求した特典は４つ
・「エア・ギア」に出てくるレガリアすべてを詰め込んだＡ・Ｔをくれ
・世界をＡ・Ｔが普及した状態にしてくれ
・すべての王の素質
・俺の体を常人の7倍の筋繊維を持つ特異体質にしてくれ
これを要求したらなぜか神様が「おまえさんは週刊誌派？単行本派？」と聞いてきた
いまいち質問の意図がわからなかったが単行本派と答えると神は嬉しそうにしていた
なんでもこれから転生する世界はマガジンで同時期に連載されていたものらしくその世界の情報を持っているとかなりつまらなくなるそうだ
そして俺はそのまま何の問題もなく転生した
ここからは転生した後の話をしよう
俺の親はＡ・Ｔの開発者のようだったが実験中に事故が起き死んでしまった
そして俺に残されたのは莫大な遺産とその親が残した八つの玉璽

（レガリア）のみ
莫大な遺産についていては半分をスイス銀行に、半分を親の右腕だった野山野さんに預けた
小学生になる時に野山野さんの勧めで麻帆良学園に入学した
そして小学5年生になるとき、路上で倒れているおっさんを見つけた
初めはスルーしようとしたのだが一瞬顔が目に入った
その顔は紛れもない俺を転生させた神の顔だった
話しかけてみると
「久しぶりじゃのう、今日はおぬしに特典を渡しに来たのじゃ
おぬしの家に届いとるはずじゃから帰ったら確認しておくように
それと特異体質のほうじゃがこれから今までゆっくりと強化してきたのじゃがあと2年ほどで完成するのでな
ゆっくりまつがよい」
それだけ言うと神の体は砂になって崩れた
俺はわくわくしながら寮に帰った
すると俺の部屋には小包が届いていた
急いであけるとそこには一つのA・Tが入っていた
それは一見一般的なA・Tだが履いてみると全く違った
なんというか、言葉では言い表すことができない感覚だった
その日から俺は暇さえあれば練習ばかりしてすべての玉璽を使いこなせるようになっていた
そしてなんやかんやでチームを作り、なんやかんやで大きくなり、なんやかんやで王の資質を持つ奴に親が作った玉璽を渡して最強チームにのし上がった

そんな俺は今急いでいる

「炎馬！急がないと寮監に殺されるぞ！」
「待ってくれよ宙！僕はまだ君ほどのスピードを出せないんだ」
理由としては単にチームの集まりが長引いたというだけ
俺が作ったチームはどんどん大きくなり今では学園外にもその傘下がいる
そんな大きなチームの集まりなんだから遅くなるのは当然だ
だが今日はそのほかにも俺たちに絡んでくる奴らがいたので余計に遅くなった
一見すれば俺も炎馬もただの小学６年生だから実力の差も知らずにからんでくるのはよくあることだ
そんな不幸を感じながらこれ以上からまれないようにと石の王の走紋センサーで周囲を探すとおかしな集団が引っ掛かった
弱弱しい走紋を追いかけるいくつもの走紋
これは間違いなくからまれていると考えていいだろう
俺の中の小さな正義が燻ぶりだした
「炎馬！ちょっと寄り道するぞ」
「は？急がないと寮監になんて言われるかわかんないよ」
「いいから、近くに絡まれている奴がいる
走紋からしてバッテリー切れ寸前だ」
「はぁ、しょうがないな
宙はその時々出てくる正義の心どうにかしなよ」
「正義のどこが悪いんだよ」
「たまにしかやらないから予測がつかない
つまり僕らが振り回されるのさ」
「ははは、返す言葉もないよ」
「で？どうするの？
ほかのみんなも呼ぶ？今ならみんな来るのにそう時間はないだろうけど」
「一応呼んどけ
それともう見えたぞ、からんでるやつら」
「一斉送信完了！これですぐに来るはずだよ」

「それじゃあ」
「「ブっ殺!!」」

ギア3

そこに現れた影はどう見ても私と同学年の男子二人だった
一人は黒髪で背の小さ目な少年
顔は整っているほうで目はまるで狐のように細い
足に履くのはどこにでもありそうな普通のＡ・Ｔ
もう一人の少年は背は高めで髪の毛の赤い少年
こちらも顔は整っているほうだがどちらかというと黒髪の少年のほうが私は好みだ
履いているＡ・Ｔは全体的に赤を基調としところどころ炎が描かれている
そして二人がやってきた道はなぜかわずかに揺らいでいた
「あん!?なんなんだよてめーはよ!関係ねーがきは引っ込んでろ!!!」
馬鹿のリーダー格らしきやつが二人の少年につっかかってきた
すると黒髪の少年はこう言い放った
「黙れ愚図、他人のパーツを奪い取るなんてことをする野郎とは話したくない」
少年はそのままリーダーを無視して私のところまできた
「大丈夫？けが無いかい？」
「え？あ、あぁ大丈夫だ」
「そうかい？それならよかった
バッテリー切れか？俺の予備のバッテリーで行けるかな？」
少年は私のことを気遣ってくれた
思わずどきっとしたのは私の気のせいだと思う
であって数分の少年に恋をするなんてどこの漫画だ
そんなことを考えているとふと私の視界に動くものが止まった
それは馬鹿どものリーダーだった
そいつは黒髪の少年の後頭部めがけてＡ・Ｔで十分に威力のつけたけりをかまそうとしていた
「あ、あぶな」

そのことを伝えようとしたのだが間に合わない
そう思ってとっさに目をつぶった
だが聞こえてきたのはけりによる鈍い音ではなく
「時よ」
少年の声だった
目を開けてみるとそこにはけりの体制のまま止まっている馬鹿と
そのわきにいる無傷の少年が見えた
そして少年が先ほどまでいたはずの場所には炎ができていた
そして少年は馬鹿の横っ腹を殴りつけ、馬鹿を吹っ飛ばした
これは比喩表現でもなんでもなく文字通りぶっ飛ばしたのだ
それは近くにあった木の幹に当たり止まったが馬鹿は明らかに気絶している
「ほかに文句あるやつは？」
少年がそういうとあたりが静まり返った
そして馬鹿どもが口をそろえていった
「「大有りじゃぼけぇ！」」
え!?
私の頭の中は疑問符によって埋め尽くされた
普通リーダーがやられたらあきらめて逃げるもんじゃないの!?
「鮫田さんを倒したからって調子に乗んなよ！」
「俺たち『フィッシャーズ』なめんな！」
「おい！誰か鯱さん呼べ！」
この怒号から察するにこいつはＲＰＧでいう中ボスあたりで本当のボスはその鯱とやら
だからまだこんな威勢のいいこと言えるんだ
すると背後からものすごいうなり声が聞こえた
振り向くとそこには巨人がいた
「その必要はねぇよ」
その声はどこまでも響き渡るような低い声
「小僧、なめた真似してくれてんじゃぁねーか
なかなかやるようだがここで終わりだ

この〝海王〟の鯱様の手によってな」
勝てるわけがない
逃げよう！
そう口にしようとしたのだが口がうまく回らない
だが少年はそんな状況になっても変わらなかった
「〝海王〟？聞いたことないね
自分でつける二つ名ほど悲しいものはないぜ？
そもそもお前にかまってる暇ねーし
この子かついで逃げればいいだけだろ？」
「そんなまねさせると思うか？」
鯱とやらは急に私に近づいてきたと思ったらいまだ私の手の中にあるパーツの入った袋にステッカーを張り付けた
つまりこいつらはこのパーツは自分のだと主張すると同時に挑発してきたのだ
ライダーなら逃げずに戦えと
ステッカーを上から貼る行為はつまり宣戦布告
こいつらはそれを促しているのだ
その時少年の目が輝きだした
「おもしれーじゃん、こんなやつらの中にわかるやつがいるなんてびっくりだ
いいだろう、その挑戦受け取った！」
そしてその少年は袋のステッカーに重ねるようにステッカーを張った
そのステッカーに書いてあったエンブレムに私は驚愕した
麻帆良学園を拠点とする構成人数たったの7人ながらその傘下には数千を超えるチームがいるという化け物チーム
『オール・ジョーカー』

ギア４

『オールジョーカー』
このチームのメンバーになるにはわかっているだけで二つの条件がある
一つはリーダーからの推薦
推薦される基準はいまだ不明だがＡ・Ｔをやったことのないものも推薦されたらしい
二つ目はほかのメンバーと戦い勝利すること
ただしメンバーの一人一人が王であり特別なパーツを持っているらしい
このほかにも基準はあるらしいが不明
たった7人なのに数千のチームをまとめ上げている
まさに伝説級である

そこに張られたエンブレム
それはピエロが満面の笑みで歯の部分にオールジョーカーと書かれている
間違いない
これは本物である
何度も何度も学園で見て、そのたびに憧れと恐怖を感じたエンブレムである
彼らのホームは麻帆良学園全体であるがこのチームはそのほとんどをあらゆるライダーに開放しているのだ
曰く、強力なチームのもとでその重圧の中で良いライダーを厳選している
曰く、少人数ではこの広い地域をまとめきれないから
曰く、単なる気まぐれ

などなどいろいろな種類のうわさがある
私は怖かった
この実態のつかめないチームが
うわさしか情報がないこのあいまいさが
なによりも異常なこの学園で一層異常に思える空気
一度メンバーが数人集まって買い物しているのを見たことがある
それはどこまでも普通でそのふつうは学園の普通ではなく学園外（そと）の普通
うらやましかった
私は普通なだけで周りから拒絶された、居場所がなかった
それなのに彼らは楽しそうに笑っていた
異常なことがあったら唖然としていた
私もあんなところにいたい
私のＡ・Ｔを始めたきっかけとはこんなもんだ
そんなチームが目の前にいる

「どう？怖気づいた？」
空は問いかけた
彼の目は期待に満ち溢れていた
それもそのはず
彼はここ半年一度もパーツウォウをしていないのだから
彼の相手はいつもこのエンブレムを見ると逃げて行ってしまう
彼のチームは強くなりすぎた
感がなまらない程度には仲間と模擬選をしているが本番とは全く違う
スリルがないのだ

本番独特のひりひりとした感じ
周りからの視線
「勝つ」という点のみ意識した時に感じる自分の中の扉を開く感じ
すべてに飢えていた
そんな彼が久々に出会えた真っ向勝負をしてくれるかもしれない
あいて
期待しないわけがない
実をいうと彼は海王・鯱の名前も聞いたことある
だが挑発のために知らないふりをしたがそれは正解だったらしい
鯱の頭に昇った血はこのエンブレムを見ることによっていくらか
下がったがそれでもまだ登ったままだ
「そんなわけないだろ、一瞬驚きはしたけど要は勝てばいいんだ
お前みたいなガキに負けるかよ」
鯱は冷静さを失っていた
表面上は冷静そうだが心中は穏やかではない
いつもの彼なら絶対に逃げ出す
彼はこれでもA級ライダーだ
実力差はわかる
それでもなお彼は逃げなかった
怒っていたから
これは勇気ではなく無謀
これはすでに勝敗が決しているようなもの
ましてや冷静さを欠いたこの状態では勝負どころではない
どんなに彼が有利な勝負であろうと勝てない
そんな内容を詳しく言うのはかわいそうだから大まかな流れだけ
解説しよう
勝負の内容はガチンコ
その名の通りただのタイマンである
だが一つルールがある
それは交互に一回ずつ攻撃を行うこと
公平をきすための物にも見えるがこれは純粋なパワーの対決にす

るためのもの
体格やパワーの優れた者に圧倒的に有利な対決方法である
この点では彼は間違っていなかった
普通自分よりも背の小さな者を相手にするときはパワー勝負に持っていこうとするのが普通だ
だが相手が悪かった
宙の肉体は常人の7倍の筋肉繊維を持つため普通ではない
それに気づかぬ彼は先行を宙に譲ってしまった
宙は限界まで近づき腕を前に出した
宙からすれば前に出しただけだがはた目から見るととてつもない勢いのパンチだ
そんなパンチを食らった彼がただで済むわけがなく地面に頭から落ち気絶した
今度こそリーダーをやられた馬鹿どもは引き下がると思ったがそんな気配はなかった
馬鹿どもは全員倒れていたのだから
連絡を受けた『オールジョーカー』の残りのメンバーがすべてのしていた
対決にかかった時間は約３０秒
この時間で全員を倒してしまったのだ
あまりもあっけない幕引き
千雨は呆然としてしまった

キャラクター紹介

南　宙（みなみ　そら）

年齢１１歳
性別男
身長１３８ｃｍ
体重４９．５ｋｇ
好きなもの　Ａ・Ｔ、Ａ・Ｔの調律、仲間とだべること
嫌いなもの　野菜、腰抜け
備考　神様によって転生させられた転生者
　筋肉繊維が常人の７倍なので身長は低めだが体重は重め
　無限の音階によって王の資質のあるものとないものの区別がつく
　『オールジョーカー』の創始者

石目　炎馬（いしめ　えんま）

年齢１１歳
性別男
身長１４５．１ｃｍ
体重３８．８ｋｇ
好きなもの　炎、Ａ・Ｔ、宙
嫌いなもの　雨、兄弟
備考　炎の王
　兄がいるがなぜか本人は苦手らしい

なぜか影が薄くて時々忘れられる

炎の玉璽を所有し使いこなすためにあらゆる道に精通している

『オールジョーカー』の最初のメンバーで新しく入ってきたメンバーの教育係り

ギア５

「それでは、千雨ちゃんの加入を祝して、カンパーイ」
「「「カンパーイ」」」
　ワイワイガヤガヤ
「…どうしてこうなった」

３０分前

「紹介しよう、うちのメンバーたちだ
　詳しいことは本人から聞くように
　そんなことはどうでもいいからうちに入らない？」
「え？何言ってんの？」
「イヤー、君雷の王の素質持ってるよ！
　だからうちに来てその才能を活かさないか？」
「いや、意味が分からないんだけど」
「そうだよ宙、こんないきなりじゃあこの子も困っちゃうよ」
「んだよ炎馬、今勧誘中なんだよ」
「だからその勧誘の仕方が悪いっての
　最初っから順を追って、落ち着いて勧誘しようよ」
「お、おお、影薄かったの！あんた常識人だな！」
「その覚え方はなかなか来るものがあるけど」
「おっと、悪かった」
「いいよ、自己紹介もしてないのだから仕方がない
　僕の名前は石目　炎馬
　炎馬ってよんで、これでも炎の王だよ、ちなみに小学６年生」
「私の名前は長谷川千雨
　炎馬と同じく小学六年生」
「俺は南　宙ね、年も同じだから

よろしく
ところでチームはいらない？」
「だから落ち着けっての
まだほかのメンバーの分が終わってないっしょ」
「僕は岩田　剛　中三で一応最年長
石の王だから、よろしくね」
「あたしは野山野　檸檬こいつと同じ中三ね
ちなみに棘の王だよ、よろしく」
「わ、私は野山野　柚子です
これでも契の王やってます、よろしくお願いします」
「ちなみにこの子あたしの妹ね！」
「俺の名前は牙田　王人略して牙王、中二
牙の王な、これからよろしく略してこれよろ」
「あと一人いるんだけど今入院中だから
自己紹介も終わったしうちのチームに」
「だから落ち着けっての」
ゴンッ
「ゴフッ」
「スゲー、さすが牙王、ワンパンで気絶させたよ」
「おつかれ、ありがとね
それで千雨ちゃん、順を追って説明するね
うちのチームは「オールジョーカー」って言ってホームは麻帆良学園にあるビルなんだけど」
「それぐらいは知ってるよ、私麻帆良の学生だもん
あんたらは有名だしうわさもいくつも聞いたことがある」
「あ、そうなの？じゃあ簡単だね
うちのチームは今7人しかいないんだ、とっても人材不足でね
うちの今のところの目標は八人の王を全員集めること
現状二人ほど足りないね」
「は？そこの伸びてんのはどうなんだ？
「オールジョーカー」は全員が王なんだろ？」

「宙は特別なのよ、まぁ企業秘密ってやつよ」
「うちに足りない王は雷の王と風の王のふた枠
資質がありそうなやつがいてももう一つの条件をクリアできていない
だからなかなか埋まらないんだよね」
「もう一つの条件？あの王と戦って勝つってやつか？」
「ち、違います。それはあくまで資質がありそうな人を振るい分けようとして私が流したデマですから」
「もう一つの条件ってのはね」
「異常を異常と判別できるかどうかだよ」
「!?」
「あ、宙起きたんだ」
「あー、あったまいてぇ」
「鍛え方が足んないぞ略して鍛たん」
「うっせ、略すな、
千雨ちゃん、俺にはすべての王の資質があるんだ」
「なんだよそれ、チートかよ…」
「まぁ、反則級だわな、はっはっは
そんな反則級な俺の奥義の一つ、「無限の音階」ってのがある
こいつはすべてのものが音になって聞こえるってやつなんだがこいつは人にも有効でな、
触っただけでそいつの素質がわかっちまうんだ
ついでに人との違いもなんとなく分かる、それぞれの音がするんだ
活発なものにはその音が、腹黒い奴にはその音が共通して聞こえる
そして、異常を正しく判別できるやつも共通した音が聞こえる」
「ほん、とか？」
「ああ、嘘はつかない」
「人が吹っ飛ぶのは異常か？」
「ああ、この上なく異常だね」
「人が屋根から屋根へ飛び移って走っていくのは？」
「Ａ・Ｔなら可能だが普通の靴では無理だ」

「じゃあ、それを平然と受け入れている奴らは？」
「異常だ、俺たちは普通なんだ」
「ほん〝どに〟…？」
「ああ、だから泣くなよ
　みんな一緒だ、同じ悩みを持っていたやつらばっかりだ
　だからうちのメンバーになれよ、仲間になろうぜ
　もうお前は一人ぼっちじゃない」
「う〝ン〟…、もう一人はいやだ」
「ＯＫ、これから俺たちは仲間で、友達で、家族だ
　な？みんな」
「「「「おう！」」」」」
「それじゃあ、ホームに戻ろうぜ、新しい家族の加入を祝してパーティーをやるぞ！」
「ちょっと宙！何言ってんの!?門限は？」
「細かいこと気にすんな炎馬
　みんなで無断外泊だ！」
「ちょっ、さすがにやばいって！
　みんなも何とか言ってよ！」
「今日ぐらいはいいんじゃない？
　やっと出会えた仲間とすぐに別れるのはつらいものがあるよ」
「そうよ、どうせ学園長も黙認してくれるだろうし、問題にはならないわ」
「おねぇちゃんがいいって言うなら」
「余計に影薄くなるぞ略してよけかげ」
「みんな適当すぎない!?あと牙王はあとで覚えておきなよ」
「…プッ、あはははは！
　楽しいなチームだな！」
「そうだろそうだろ、この家族はいいぜ、どんだけたっても飽きる気がしないよ」
「ありがとな、宙」
「いいってことよ、ところでなんに対してのありがとう？」

「いろいろだよ」
「ふーん、まあお礼言われて損はないか、
ところでパーティー行こうぜ！主役がいないなんてありえないしな」
「もちろんだろ！」
「よっしゃ！おい炎馬！千雨行くってよ！」
「は!?ほんとに!?こんな時間だよ！」
「私みんなとまだ一緒に居たい」
「…じゃあ、しょうがないか。
まぁやるんだったら盛大にやりたいよね
近くにいる傘下のチームに声かけてみるね
食べ物とか飲み物とか買ってきてもらおうか
あと檸檬と柚子は博士も呼んどいて」
「了解！（です）」
「なぁ、何気に一番ヤル気あるのって炎馬じゃね？」
「あいつ根っからの仕切りやなんだよ」
「まぁ準備は炎馬に任せて俺たちは先に行ってようぜ」

そして冒頭に戻る

「なんなんだよこの人数、ざっと数えて１００人はいるぞ？」
「これでも少ないほうだぜ、傘下のチームは日本中に散らばってるし今回はチームのリーダーだけを招待したからな」
「それだけうちの新メンバーの加入は衝撃的なことなんだよ」
「それでもだよ、あとさっきからちらちら見てくる奴がいんだけど何？」
「ん？あー、あれはこれから千雨ちゃんの傘下に入る予定のチームの

やつらだよ」
「は⁉聞いてないんだけど！」
「大丈夫、傘下になるのは大体半年ぐらいたってからだから」
「そういう問題じゃねーよ！」
「あきらめろって、みんな傘下チームを持つのが義務みたいなもんだから」
「それまでの半年は僕のもとで練習だからね」
「炎馬は教育係もやってっから、まじめに練習しろよ」
「教えてくれるのはありがたいけど傘下チームは遠慮したいんだが」
「ダメ」
「ですよねー」
「盛り上がってるところ悪いけどいいかしら？」
「？誰ですか？」
「私は野山野　苺
　檸檬と柚子の母親よ
　宙君の保護者代わりでもあるわ」
「は、はじめまして
　何かご用ですか？」
「簡単なことよ
　うちの会社と専属契約してもらいたいの」
「は？どういうことですか」
「この人はうちのチームと契約を結んでいるの技術会社の人だよ
　聞いたことないか？サウスカンパニーってところだけど」
「それってＡ・Ｔの最大手じゃん！そんなとこと専属契約⁉」
「そうよ
　ちなみにあなた以外の王たちはみんな結んでいるわよ」
「まじで？」
「ああ、炎馬も剛も檸檬も柚子もみんなだ」
「契約内容はこんなものなのだけど、どう？」
「…は⁉なんだこれ！小学六年生と結ぶ契約内容じゃねぇだろ！」
「ちなみにいうとそれは一年契約で実力と知名度に比例してここから

上がっていくわ
A・Tも希望があればそれを用意するしできるだけのバックアップはするわよ」
「こちらこそよろしくお願いします！」
「契約完了ね」
「うっしゃ！
ここで千雨ちゃんとサウスカンパニーの契約が無事結ばれたことを祝して、カンパーイ！」
「「「「「カンパーイ！」」」」」

ギア6

半年後の秋

「よし、これで僕の教えることはほぼなくなった
免許皆伝だよ千雨ちゃん」
「ほぼってなんだよ炎馬
それにこの最後に教えられたワイヤーの扱いって役に立つのか？」
「もちろん！これは雷の玉璽に関係していくんだけどね
それじゃあ宙をよぼうか、いよいよ玉璽を受け取る日が来たよ」
「マジで！よっしゃ」
プルルルル
『もしもし？』
「もしもし？宙？
千雨ちゃんの特訓終わったよ」
『マジで？よっしゃ、じゃあこれから迎えに行くからって千雨に伝えて』
「了解、じゃあ千雨ちゃんだけここに残して僕帰っていい？」
『あん？なんだよまたデートかよ』
「うん、悪いね」
『しゃあねぇか、楽しんで来いよ』
「ありがと、じゃあね」
プチッ
「千雨ちゃん、それじゃあ今から宙が迎えに来るから待っててね
僕はこのまま出かけちゃうから」
「ん、わかった
檸檬さんによろしくな」
「わかった
またね、雷の王」

「ンだよよその呼び方、ってもういねぇし
　はえぇな、オイ」
「お待たせ！」
「宙!?もう来たのかよ！炎馬以上にはえぇなオイ！」
「寮からダッシュできた！」
「は!?お前寮からここまで自転車で大体１０分かかるぞ！」
「風の玉璽使ってきた！」
「お前全力かよ！」
「そんなことはどうでもいから行くぞ」
「どうでもよくねーよ！また目立つぞ！」
「いいんだよ、どうせ何にもされねーし」
「一緒に居る私に迷惑だっつーの！」
「ほら行こうぜ！もうあっちには連絡入れてあるんだ」
「あっち？サウスカンパニーか？」
「いや、ここの学園長」
「は？おいおい、そんなところでいいのかよ
　この世に一つしかないんだぞ!?」
「いいんだよ、あそこはうちの会社より安全だ
　何より交渉材料になってるんだから」
「交渉？なんだよそれ」
「おかしいと思ってなかったのか？
　うちは自由過ぎないか？」
「まぁ、確かに思ってたけど」
「俺たちの行動に一切の干渉をしないって条件であっちに預けてるんだ
　預けている間は麻帆良の技術研究部で壊さない程度なら調べていいって」
「へー、なるほど
　って、解析されたらまずいんじゃぁねぇの？」
「大丈夫だよ、あれはブラックボックスで隠してある部分が相当ある
　内部のつくりを調べたところでできるのは普通のよりも少し性能

がいいホイールだけだ」
「なるほどね
　それじゃあ行こうぜ、早く玉璽履いてみてぇ！」
「ここまで行くの伸びたのって千雨が原い…なんでもないからにらむな
　あと、最低でも履けるのは明日以降だぞ？
　調律とかいろいろやんなきゃいけねぇし」
「えー、まじかよ
　まぁ行くだけ行こうぜ」
「よし、じゃあ行くか」

麻帆良学園　学園長室前

「いいか？千雨
　この先に怪しいのがいたら遠慮なくワイヤーで縛り上げろ
　もしも盗人だったらしょうがねぇからな」
「大丈夫って言ったの宙だろ？そんな怪しい奴なんかいるわけないだろ」
「とりあえずだよ
　じゃあ入るか」
　コンコン
「入ってよいぞ」
「失礼します」
「ようこそ、宙くん、そして新しい王よ、わしがこの学園の学園長じゃ」
「(…人間離れした後頭部、目元と口元が隠れるほどのひげ、間違いない、)
　不審者だ!!」

「ふぉ!?いきなり不審者呼ばわりかの
　わしは正真正銘の「ぬらりひょん」じゃ…って宙君、割り込んでこないでくれんかの」
「千雨、縛り上げろ！」
「わかった！」
「ふぉ！なかなかのワイヤー捌きじゃ、じゃがわしはこの程度よけられるわ！
　って、体が動かん」
「ニヤリ、石の玉璽発動」
「ずるい！ずるいぞ宙君！」
「いまだ！一気に決めろ！」
「おう！」
「って、なんで亀甲縛りなのじゃ！誰が教えたのじゃ！」
「炎馬、あとで私刑だな」
「ふぅ、まぁよい
　宙君、玉璽はわしの机の中にあるからとっていくのじゃ」
「わかった、じゃあな」
「ふぉ!?それだけかの!?もっとこう、ありがとうとかは」
「ない
　それじゃあ千雨、ぬらりひょんはこのまま放置していいから行くか」
「え？いいのかよ」
「いいんだよ、行くぞ」
「お、おう」
　バタン
「千雨、今度からはワイヤーで縛り上げたものの正体を見破れるように特訓な」
「は？どういう意味だよ」

「ふぅ、全くよくできた物じゃな、この人形は
宙君にはバレバレじゃったけれどもあの子にはばれておらんかったようじゃからの
それにしてもこれで残る道は一つのみ
いよいよ完成するのじゃ
空の玉璽が」

「あれが人形!?まじかよ」
「なんたって麻帆良だからな
異常なほど精密な人形なんて溢れてるよ」
「まあ、麻帆良だからな
ところで雷の玉璽はどんなつくりなんだ?」
「あん?この玉璽には小さな発電機が入れられていて、その発電量は東京ぐらいならまかなえるほどだ。親父の飛んでも発明の一つだな」
「半端ないなおい、あと、炎馬にワイヤーは玉璽に関係してくるって言われたけど、
もしかして流すのか?電流」
「まぁ正解だわな
つっても人が丸焦げになる程度だぞ」
「十分すぎんだろ」
「そうでもねぇよ
牙は大木切り倒すし石は空気ごと固める、
棘は衝撃波飛ばしてくるし契は王が8人に増える
轟は壁まで作れるし、風に至っては空気の密度の差を走るんだぞ
炎は特別だけどな
それに比べたらなんてことねーよ」
「そういわれて納得する自分が嫌だ」
「ははは、元気出せって」

ギア7

翌年の春

「もーやだ！」
「ホームに来たとたんにどうしたの？千雨」
「剛か、今日中学の入学式だったんだけどな」
「そうなの？じゃあお祝いしなくちゃね」
「それはうれしいけどちょっと話聞いてくれよ
入学式でそのあとクラスに分かれてホームルームだったんだけどよ
そのクラスが異常すぎたんだよ」
「？いつもの麻帆良じゃないか」
「どう見ても小学低学年並みの身長が3人、ロボが一人、高校生みたいなのが2人、初日からさぼりが1人」
「それは、多すぎるね」
「極めつけに学園長の孫娘がいたんだが
そいつが、まともだったんだ」
「え？まともなことのどこが異常なのさ」
「よく考えてみろ、あの学園長の孫娘だぞ」
「まさか、後頭部がまともだったとか？」
「正解だよ！遺伝子仕事しろよ！」
「ははは、すごすぎだね」
「ほんとだよ
それになんか変なロリッ子に絡まれるし」
「からまれる？なんで？」
「なんでもA・Tに興味があるらしいよ」
「あれ？千雨学校にA・T持ってったの？」
「ん？いや、持っていってないけど」
「じゃあ、なんで千雨ちゃんがライダーってわかるのさ

千雨ちゃんを知っているのは傘下チームだけでネットとかには載せてないはずだし
練習はずっとこのホームの中でやってたんだから」
「大方、町を走ってるのを見たことがあるとかそんなもんだろ？」
「でも、千雨ってあの癖あんじゃん」
「あ～、そうか、じゃあなんでだ？」
「一応宙に伝えておこうか、そうすれば学園長経由で何とかしてくれるでしょう」

「ん、了解
何とかやってみる」
『頼むぜ、宙』
「じゃあね、千雨」
プチっ
「さて、わざわざ呼び出して何の用だ？学園長」
「なに、紹介したい者がおっての
入ってくれ」
ガチャ
「ようやくかじじぃ、さっさと紹介すればいいものを」
「なんだこのロリッこは」
「この者はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル
雷の王の同級生じゃ」
「だからそれがどうしたんだよ」
「鈍い奴だな
本当にこんなやつが空の王なのか？」
「あん？なんで知ってんだよ
学園長、てめぇ契約に違反する気か？」

「ふぉ、そんなつもりはないぞ」
「じゃあどういうつもりだ
契約の中に部外者に俺の存在、素性、あらゆることを教えることを禁止するってあるはずだが？」
「関係者じゃよ裏のな」
「裏だぁ？魔法関係かよ
その魔法使いが何の用だよ」
「簡単なことだ
その玉璽を渡せ」
「はぁ？何言ってんだこのバカは」
「すまんの
どうしても会って話してみたいというのでな」
「ふざけるな、却下だ」
「貴様に拒否権はないぞ」
「黙れ、消えろ、二度と視界に入ってくるな」
「ほう、よほど死にたいらしいな」
「死ぬのはてめぇだ馬鹿」

学園長室から突如聞こえた爆音
その音の正体は宙が発動した牙の玉璽による牙だ
それは学園長室を切り裂き、正確にエヴァの胴体をとらえていた
普通ならば体は牙によって真っ二つに分かれるはずなのだがエヴァは普通ではなかった
魔法使いという点ではなく吸血鬼であるという点がエヴァを救った
それでも衝撃を防ぎきることはできなく、外に弾き飛ばされた
エヴァは内心驚いていた

その少年の能力に、何よりも玉璽のスペックに
(じじいからの頼みだからと思っていいたが
これはなかなかいい発見をした)
彼女は今空を飛んでいる
そしてそんな彼女に突風が襲いかかった
それは宙が生み出した風、空気の密度の差の面に力を加えることによって起こした風だ
思わず目を覆ってしまうエヴァだがそれが致命的だった
彼女が目を開いたときその目に映ったのは空に浮かぶ宙の姿だった
自らが作った風に乗り、そしていま、その風を吸い込んでいる
轟の玉璽、それは空気を圧縮し超臨界流体に変え、壁を作り出す
その玉璽がとてつもない量の風を吸い込んでいる
そして生み出された壁はとても大きなものだった
そんな壁が吹き飛ばされた、エヴァに向かって
それをエヴァはよけずに受け止めきった
今回は魔力による身体強化を行って受け止めた
だが受け切ったからと言って宙の攻撃が終わったわけではない
むしろここから始まるのだ

ギア８

初めについたのは学園長であった
体が動かない、この現象には心当たりがあった
石の玉璽
それは水晶振動波によって物質を硬化させたりすることのできるもの
これを風をつかむ能力によって強化し相手の体を動かなくしている
だがこんな原理はわかっても防ぎようがないのがこの玉璽の恐ろしいところである
そして何よりも彼はもう走っていない
空気に立っているのだ
空気を固め、相手を固める
言葉にすれば単純なことだがやってのける彼は化け物である
（ほしい、ほしい！彼が！彼がいればわしの計画は格段に進歩する！
何よりもあの玉璽、天才南　大地が作り出した最高傑作
あれと空の玉璽の二つがあれば敵なしじゃろう
だが、使い手が惜しい
あの歳でここまで使いこなせるのはすごい
だからこそほしいのだ
しかし、欲がない
いや、小さいというべきか
己の周りが良ければそれでいい
強大な力もそのためにしか使わない
宝の持ち腐れだ
だからわしが奪う
もっと有効に使ってやるのじゃ）
学園長の計画には力が足りない
権力や人脈などではなく純粋な力が

そんな問題を解決するものを他人が持っていたときする行動は一つだけ

奪い取る

学園長がこんなことを考えているとき

同じことを考えるものがもう一人

（ククク、面白いじゃないか

初めはじじいの頼みだからと乗り気ではなかったが本当にほしくなったぞこの力

空気を固めるなどという離れ業をやりおって

しかし困ったな、空気を固めたということは霧になってもその場から動けないではないか

仕方ない、力技で押し切るか）

だがそんな暇を与えるほど彼は甘くなかった

エヴァの周りの空気に炎の牙が現れた

牙の道の無限の空、無限の牢獄

周りに無数の牙がとどまり動くことすらままならなくなる

今回はそれが炎をまとっている

しかしそれだけでは終わらない

雷のワイヤーがその周りを包み

轟の壁が密封している

すべての道によって作られた回避不可能の絶対牢獄である

これを突破できるものは普通はいない

「おい、十秒以内に「すいませんでした、もう二度とかかわらないので許してください」って頼んでみろよ

そうしたら考えてやらないこともないぜ」

そう普通なら

忘れてならないのは彼女は真祖の吸血鬼で今晩が満月であること

そして吸血鬼の再生能力の高さである

彼女は力ずくで突破したのだ

固められた空気は己の腕力で
皮膚がそこに置き去りにされようと気にせずに
牙を受けながらワイヤーによる電気を耐えながら
皮膚が焼けようと引き裂かれようと気にしない
壁は殴って壊した
骨が粉砕しながらも
そうして檻から抜け出した彼女はすぐさま霧になって逃げだした
さすがに何の準備もなしに勝てる相手ではないとわかったのだ
そして戦闘は終了した
エヴァの逃亡という形で

「さて、言い分を聞こうか？
俺をあんな危険人物に合わせた理由と千雨のクラス分け、そしてお前の企みを」
ここからは二人の心理戦が始まる

ギア9

「ふぉふぉふぉ、計画を教えろか
　いいじゃろう、教えてあげるよ、わしに空の玉璽を渡したらの」
「やっぱ最初っからそれが狙いかよ」
「当然じゃ、誰が好き好んでそのような面倒なことをするか
　すべてわしの計画のためじゃ
　最初はおぬしに預けられた玉璽を解析して空の玉璽を目覚めさせようとしたが無理じゃった
　じゃから今度はおぬしたちを使おうとしたのじゃ」
「そうかい、じゃあ空の玉璽を使って何をしようとしていたのか答えてもらおうか？」
「残念じゃがそれはできん相談じゃな」
「あっそ、じゃあ体にきくまでだよ」
「そんなことをしてもいいのかのう
　わしがおぬしと敵対するかもしれんのに何の仕込みもないと思ったのか？」
「どういう意味だ」
「そのままじゃよ、わしは今日おぬしの仲間に対して仕込みをした
　そうじゃな、そろそろ君の仲間は寮に向かって帰り始めるころかのう」
「チッ、ふざけやがって
　わかったよ、今日はもういい
　だから風の玉璽だけ返せ」
「素直に渡すとでも？」
「渡さなかったら学園どころか世界中のライダーが敵になると思えよ
　その覚悟があって言ってるんだよな？」
「ふぉふぉふぉ、いいじゃろう
　そもそも空の玉璽は風を持っていただけでは意味がないからのう
　おぬしたちがすべてをそろえたら奪うことにするとしよう」

「それはうちのチームに対する宣戦布告でいいんだな？」
「そうとってもらって構わんよ
　えっと、確か玉璽は机の中に…っとあったあった
　ほれ、正真正銘本物じゃ」
「どれ…音に狂いはないな
　確かに」
「おっと、もういなくなってしまったか
　早すぎじゃろうに
　どれ、襲撃に行ってもらったものに決して玉璽は壊さないようにと
言っておかねばのう」

「あー、遅くなっちまったな
　これじゃあ女子寮につくころには大部遅くなってんな
　まぁ一人部屋だしいいか」
「おや、こんなところで何をしているのかな？」
「ビクッ、…高畑先生ですか
　今から帰るところですよ」
「おや、名前を憶えてくれたか
　ありがとうね」
「いえいえ、普通ですよ」
「そうだね、普通だ
　普通だからこそここでは異常だ」
「…どういうことですか？」
「かなしいなぁ、僕の生徒が一人減ってしまうなんて」
「ッ！」
「おや、ワイヤーか

扱いもうまいし気配をほぼ消していた
さすが雷の王だね」
「そんな恰好でいってもうれしくねぇよ
つーかあんた何者だ？少なくとも機械とかそういうたぐいのものではないけどよ」
「なに、ただの教師さ、魔法が使えるだけのね」
「な!?ワイヤーがちぎれた!?」
「ふふふ、ごめんね、これも必要な犠牲なんだ」
（やばい！この感じ、受けたら死ぬ
よけるか？いや、間に合わない。ワイヤーで盾を？それもだめだ）
「あ、無理っぽい」
「あきらめちゃだめだよ、千雨ちゃん」
「な、僕の居合い拳を止めた!?」
「え、炎馬？なんで」
「空からの命令でつけてたんだよ
千雨はまだ王として未熟だから護衛に行けって」
「宙君から？ということはエヴァは敗れたのか」
「まぁ、そんなことはどうでもいいんだ
今重要なのは君たちを殲滅することだけだ」
「は？そんなことして教師がいいのかよ！」
「記憶ぐらいどうにでも操作できるんだよ」
「まぁそんなことはさせないけどね
千雨ちゃん、見ててね
君がいずれ習得しなければならない技能だから」
「君ごときに止められるわけがないだろう？
正義のためにやってる僕が！正義は絶対勝つんだから！」

ギア１０

「まず一つ目、空気の面をとらえる」
「！手を前に掲げただけで風を起こした⁉
　それができるのは宙だけじゃなかったのか」
「そのとおり、これはすべての王が使えるようになるものだ
　それによってそれぞれの道を強化することができる
　いいかい、千雨ちゃん
　僕たちの通る道はすべて空気に関係している
　つまり、空気を操ることができれば道はさらに強化されるんだ」
「ふふふ、こんな状況で授業かい？
　それじゃあ僕も授業をしてあげよう！裏の厳しさをね！」
「そして二つ目、立体把握幹
　これはその空間すべてを完全に把握し、次の行動をほぼ完ぺきな精度で予測する能力
　それを応用すれば」
「な、行動の起こりを止められた？」
「このように相手の行動の起こりを止めることによって相手の行動を封じることができる
　ただし、完全に止めるには僕と同じぐらいの速度が必要だがそこは工夫次第でどうにかなる
　ただし」
「な、めるな！この程度で！」
「このようにある一定以上の強さを持つ人にはあまり効果がない場合が多い
　そこで三つ目、それぞれの道を深く理解すること
　そうすると新しい技が見えてくる
　たとえば僕の場合は」
『爆風の道』
　爆弾檻（ボムジェイル）

「ぐ、ぐあぁぁぁぁぁ！」
「すごい、炎をのせた風が先生を中心に渦巻いている」
「こんな風にできる
この三つはおいおい覚えていくといい
さて、この後は授業をする余裕はないかな」
「咸化法
ふぅ、僕は君を侮っていたよ
これからが本気だ」
「今まで何にもやってなかったくせに何言ってんですか？」
「黙れ！豪殺居合い拳！」